

Active Learning の理論と実践に関する一考察 LA を活用した授業実践報告 (7)

著者	三浦 真琴, 松田 昇子
雑誌名	関西大学高等教育研究
巻	7
ページ	1-13
発行年	2016-03-31
その他のタイトル	A Study on the Theory and Practice of Active Learning Report on the course supported by Learning Assistant 7
URL	http://hdl.handle.net/10112/10046

Active Learning の理論と実践に関する一考察

LA を活用した授業実践報告 (7)

A Study on the Theory and Practice of Active Learning Report on the course supported by Learning Assistant #7

三浦真琴・松田昇子

要旨

『「恋する学問」は、関西大学の学生科目提案委員という制度を利用して、私たち学生3人が、2年間かけて企画・立案した全学部対象の一般教養科目です。先生や大学職員さんのお力をお借りしながら、シラバス作成から、毎回の授業を90分間どうするかまで自分たちで考えています。授業を創ったきっかけは、3人とも1年生の秋学期に三浦先生の「大学教育論～大学の主人公は君たちだ～」という授業を受講していて、「身の回りにあるものへの知的好奇心」を持った学生が輝ける場所、それが大学なのだということを、もっと自分たちの言葉で伝えていきたいと思ったからです。「もっと知りたい」「もっと自分のことを知ってほしい」と思う好奇心は「恋心」と同じようなものではないでしょうか。私たちはその「恋心」を学問、チームの仲間、授業、日々の生活など、多くのものにもてるようになることを目的とし、約40人の受講生とともに授業を創り上げています。』 (Field of Invaluable learning 2016*のパンフレットより)

キーワード 学生参画型授業、学生参加型授業、学生提案科目、ラーニングアシスタント、「学生と作る授業」、「学生が創る授業」/ Learning Assistant, Course designed with students, Course designed by students

1. 学生と作る授業・学生が創る授業

学生を能動的・主体的学習者に育てるためにグループワークを採り入れたり、PBL型授業を展開したり、LA (Learning Assistant) を積極的に活用したりするなどの工夫を施している教師は数多くある。そこに通底しているのは授業における主体者は学生だという考え方である。高等教育機関は教育を提供するのではなく学習を創発する使命を帯びると高らかに宣言されてから (Barr & Tagg, 1995)、学生が主体となる授業に係わる教師の役割は、従来の「教える」ことから「学生が効果的な学習を体験できるように配慮すること」、あるいは「学生間のチームワークを構築すること」へと変化しはじめている。もとより授業は学生と教師の双方が関与するものであるから「学生と作る授業」という表現は文脈によっては基本的な前

提を改めて確認する意味しかもたない。ところがそこに学生の能動的な参加、主体的な関与を促そうと試みる (あるいは実践している) 教師の思惑あるいは自負がまことしやかに語られ、あるいは綴られると、それこそが新しく正しい学生主体の授業のあり方であるかのごとくの誤解が生じる。ここに忘れてはならないのは「教師が」という主語が省略されているということである。つまり学生を主体者として位置づけているように見えて、主体は教師自身であり、学生を実は付帯的な存在 (英語としては前置詞 **with** の目的語・客語) として表現しているにすぎない。真に学生を学びの主体者と捉え、そのように育てるのなら「学生が創る授業」「授業は学生が創るもの」というように発想を転換してみる、あるいは膨らませてみる必要がある。授業を受けるばかりでなく、創ること

で初めて得られる学びが必ずあるはずである。

学生は授業を受けながら物足りなさを感じたり、共感を覚えたりしながら、自らのうちに「望ましい授業」、「受けてみたい授業」のイメージを育てることがある。しかし、当該セメスターが終わると、そのイメージは薄れてしまうか、消えてしまうことが多い。「こんな授業があったらいいな」という願望は、誰かにお膳立てをしてもらうことを前提としている場合が多いので、ここに該当する学生は具体的な行動を起こすような能動性を持ちにくい。自分が望む授業は自分たちでデザインし、提案していくという場がかつてのボローニャ大学のように存在するのであれば、そのような受動的な姿勢から脱する契機となるだろう。望ましい授業イメージを蓄積しながら、かなり輪郭のはっきりした授業イメージを持つに至った学生を何人も見てきたため、そのような場作りが必要であると痛感してきた。イメージを抱いては忘れ、再び抱くということを繰り返している一般的な学生にとっても、自分と同じ立場にある学生が授業科目をデザインし、提案したと知れば、少なくともその科目を受講しているあいだは授業に対する考えを見つめ直してみたりするだろうし、自らの学びについて考える時間を持つ事にもなるはずである。ではどうすれば学生が主体者となる授業を創ることができるのだろうか。

「学生が創る授業」には少なくとも二通りが考えられる。一つは15回のうちの1回ないしは複数回、1回90分の全てあるいは何割かを、受講生が望み、考えたコンテンツとメソッドを有する授業に割り当てる方法である。これは受講生と科目担当者間で共通理解と合意が形成されれば実現が可能である。学生によるプレゼンテーションを採り入れている科目ならば、「自分達が受けたい授業」を課題として設定し、その授業を実践することをプレゼンテーションとして求めれば、学生の望みや願いに少しは近づくことができる。あるいは自分たちの望む授業イメージがより確かなものになる。そこに当該科目でそれまでに学んだ事、

考えたこと、調べたことを反映させることができれば学習効果も高くなる。これぞ“Teaching is learning twice.”である。

もう一つは1回90分合計15回の授業を内容から方法まで全て学生がデザインする方法である。

関西大学では2010年に当時の全学共通教養教育推進委員会（現：共通教養教育推進委員会）において「学生自らが学ぶべき事、学びたいことを考え、それを新たな科目（テーマ）の設置に繋げることにより、学生の大学での学びへの動機を高めていくことが期待されること、及びその具体策」として委員会の立ち上げが発議され、同年度より試行的運用としてスタートし、2011年度より学生提案科目が開講されている。当初は学生委員の提案は内容に限られたものだったが、最近はその内容にみあった方法まで提案できるようになっている。なお、表1に2015年度に至るまでに開講された科目を示した。

学生提案科目の開講期間は原則として二年度である。これは科目増に制約や限界があるなか、新しい科目の誕生を妨げないためである。但し、科目のテーマや内容によっては継続するのが望ましいと判断されるため、二年を超えて開講されるものもある。

学生提案科目は、学生達の要望や願いを彼ら彼女達が選んだ教師に託し、それを受けて教師が内容や構成、方法を勘案することによって誕生を待つばかりとなる。学生委員は自らシラバスを作成し、科目担当予定の教師に渡す。渡された教師はそこから、そしてまた学生委員との対話から学生委員の希望や願いを理解しようとする。多くの場合、科目担当者を誰に依頼するのかは学生委員の胸中にあるが、そうでない場合は候補者を学外にまでひろげて探し求める。大学の内外を問わず科目の担当を依頼する人物には所轄の事務職員がアポイントメントを取るなどのサポートをしている。そのようにして依頼された教師は、場合によっては学生が作成したシラバスをより確かに学生委員の願いを実現するために大幅に書き換え

ることもある。とはいえ、それはシラバスライティングの経験がなく、そのためのリテラシーを持たない学生が編んだものだからであって、彼ら彼女たちのアイデアや願い、望みに必ずしも不備があるからではない。最終的には科目担当者の好みが出てしまうケースもあるようだが、学生委員の提案の何割か（八割ぐらいは）実現する（と信じている）。

【表1 科目提案学生委員会が開設した科目】

開講年度	授業科目名	履修者数
2011	それいけ関大生 ～共に生きる4つの力～	178
	プロフェッショナルのまなざし ～マナビをマナビ。～	114
2012	“みず”から育てる関大ブランド	86
	プロフェッショナルのまなざし ～マナビをマナビ。～	128
2013	“みず”から育てる関大ブランド	51
	関大生の私にできること ～被災地(大槌町)に向き合う～	60
2014	学内留学ノススメ	43
	関大生の私にできること ～被災地(大槌町)に向き合う～	66
2015	学内留学ノススメ	49
	関大生の私にできること ～被災地(大槌町)に向き合う～	23
	学内留学ノススメ	47
	地域の防災を考える	10
	恋する学問	47

本論ではそのような科目の一つを取り上げる。科目提案学生委員会のメンバーになる前から希望する授業科目をデザインし、それを他の学生の前で発表したのち、委員会のメンバーとなって実際の授業科目としての開設を目指してリデザインを施し、開講が決まった当該科目には科目提案委員としてのみならず、LA (Learning Assistant) としても関わった学生の活動や思考、気づき、省察などの足跡を追う。

2. 前史 ～大学教育論での発案と発表～

2013年度秋学期の「大学教育論」のクラスには新しい授業科目を提案するグループがあった。2009年度に開設されたこの科目は「大学の主人公は君たちだ」をサブタイトルに掲げ、自らが通い、学ぶ大学をよりよいものにするために、自分たちに何ができるか、自分は何がしたいのかを考え、それを実行・実現するための方略などを練ってもらうことにしている。自分以外の誰か・何かが悪い、何処其処が不満なので改善してほしいという

ようなクレマー的なスタンスは、これを認めていない。そこで時を刻み、歩みを記していく主人公の一人として、どのようにしたら味わいのある時を過ごし、印象的な足跡を残していけるのかをまずは考えること、そのために身近に“problem”を発見・発掘もしくは創出すること、然る後、仲間と意見を交換・共有し、時には関わらせては合意形成を図りながら、それを実現するために何が必要なかを勘案し、プランを創り上げていくこと、それだけがこの科目で学生に求められる注文事項である（直截的に伝えることもあれば、比喩を用いて伝わるのを待つこともある）。このようなざっくりとしたフレームワークの中で、自分の望む授業を創りたいというテーマを設定するグループは毎期少なくとも1つは存在する。少数派ながらも、このテーマはいわば定番になっているが、今回とりあげるグループが提案したものは、提案当時は削りの粗いところもあったが、多方面に広がり、枝葉を伸ばして、様々なことやものにつながって実を結ぶ可能性を秘めたものであった。まずはその軌跡を簡単にトレースしたい。

2013年度秋学期の「大学教育論」のクラスには8班のグループが編成された。ほぼ毎回授業に参加していた学生は33名だったが数回遅れでクラスに初めて出席する学生が数名いたため、あるいは履修を取りやめる受講生もいたため、もしくはメンバー数が少なくなってしまったグループの合併をおこなったため、グループの員数は4名平均とはならず3名から6名までの幅があった。メンバー数が最小のチームが二班あり、そのうちのひとつが「チームあんこ」である。「班員みんながあんこ好きで、こしあん派とつぶあん派がいたので、ひっくるめてチームあんこにした」のが命名の理由である。第一回目の授業では科目担当者が受講者名簿をもとにあらかじめ考案した編成にしたがってグルーピングをおこなうが、メンバー構成に関する情報を別の形（4桁の数字）に変換して学生に渡し、その謎を学生が解くとメンバーと出会

えるという仕掛けを作っている。その初回に四人が出会うはずだったが、チームあんこのメンバーの一人は最終回まで教室に現れることはなかった。他のグループに比べてメンバー数が少ないというハンディを負いながらも、このチームは最終回まで三人のメンバー全員が皆勤で、しかも回を追うごとに結束が強くなっていった。

初回はグルーピングをおこなったあと自己紹介やグループネームを考案する時間を持つ。然る後に欧米の大学が9月始まりである理由について考えてもらう。知識を問うのではなく、欧米の大学が9月始まりである理由を知るためには何を調べたらいいのかについて考えてもらうのである。しばらくすると世界で最初の大学がどうであったのかを調べればいいのかというアイデアが出され、学生たちは得心する。チームあんこのメンバーの一人は「大学のはじまり、ルーツがそんなところにあるとは思わなかった」と関心の生じたことをレポートに記している。

第2回の授業ではグループごとにこれから探求するテーマについての話し合いをしたのち、「現在、どんなことに興味をもっているか」「この授業を通して何を学びたいか」についてレポートに書いてもらった。そこには「大学生活をよりよくするために何ができるのかということをも身近なところでみつけたい」「大学の間でしかできないことや、プレゼンの仕方など、いろんな人との交流を通じて、世界観を広げたい」と書かれている。

第3回から第5回にかけては、自分が通い、学ぶ「大学」そのものが探求するテーマとなり得ること、すなわち課題が身近に存在することを知り、科目のサブタイトルである「大学の主人公は君たちだ」ということをやはり自分に引きつけて考えてもらうために、学内外で活動している学生の団体や受講生以外の学生あるいは卒業生に登壇してもらうことにしている。その後、登壇者のプレゼンテーションを聴いて自らへのヒントや刺激にした個々のメンバーがグループでこれから取り組む課題について話し合う。チームあんこのメンバー

に限らず受講生は誰もが、目的と意志を持って活動している団体や、紆余曲折を経ながらも歩み出す方向を見いだした学生や卒業生の話に感銘を受け、自分の、そして大学の何かを変えたいと思い始める。チームあんこのメンバーはレポートに以下のように記している。

「学生でも世界の貧困のために何かができると思っただけで、とても勉強になりました」

「文豪さん（卒業生）の話はとてもリアリティがあった。大学生活はすべてがうまくいくわけじゃない、ということや、そこからどうして今の自分にいたるのかということの理由がすごくよく分かった。今日のことを通じて、より自分の興味のあることにチャレンジしていきたくなった」

「文豪さんのような、自分のしたいことをつきつめられる人になるという目標を持って、これからの大学生活を送ろうと思います。なんか、これからの大学生活にわくわくしていて、入学式に戻ったような気分です」

メンバーが個々にこのような印象を抱き、我と我が身を振り返るようになるとグループでの話し合いも熱を帯びるようになる。

「グループで考えてみると、自分では思いも寄らなかった切り口からの意見が聞けて、とても楽しいです。また、今日の自分史作成と発表はとてもひびきました。同じような思いをした人がいると気付いて安心したし、自分の送ってきた人生を振り返るいい機会でした」

自分は主人公であり、目の前にいる他のメンバーも同じくその人生の中では主人公である、ということも理屈ではなく、感覚で捉えられるようになり、他者配慮が自然に芽生える。これがグループワークをよりよいものにしていく。そればかりか、この「わくわく」と「他者配慮」が後の科目提案の伏線となっていくのである。

中盤（第7回）には中間報告をすることになっている（LAの発案による）。ここでは各グループがどのような理由で、どんなテーマを設定したか、この先、どうやってそのテーマに取り組んでいく

計画なのかを伝える。教科書や板書などの文字情報ではなく、生身の人間から発せられた言葉によって好奇心を刺激され、自己ならびに他者への視線に変化が生じ始めたメンバーは中間報告までの準備時間が短くとも、充実したグループワークを展開していく。それはレポートにも綴られる。

「みんなで大きな一枚のシートに意見を書いていくと、普段よりも意見が出しやすい気がしました。プレゼンが今日だと思っていたこともあるし、メンバーが仲良くなってきたこともあり、すすい進む様になってきました。再来週はトップバッターですが、がんばります」

この中間報告には完成度を求めない。どこから課題を発掘したのか、それは何故なのかなど、自分たちがそれを課題として設定するのは関心があることだが、それが他のグループに伝わるように配慮するだけでよいことにしている。

「各チームの発表を聴いて、自分が思いつかなかったことが多数あったので驚いた。どこのチームも今後の展開が気になるものばかりだった。発表の仕方もチームによってそれぞれで、個性が出ていて、聴いていて楽しかった。最終プレゼンに向けての中間発表ということで、他のチームの発表の仕方や考え方を自分たちのチームの今後に活かすことができればいいと思う」

上記はチームあんのメンバーの感想だが、どのグループも「伝える」ことを最優先し、どうすれば「伝わる」のかを確かに学んだと言ってよい。

各グループの中間報告に対しては受講生全員が評価をすることになっている。他者配慮が芽生えてきているので、そこには酷評はない。伸張する可能性たっぷりの「芽」を感じ取り、肯定的に、前向きに評価する声がとても多い。そのような評価に背中を押されるように、受講生は自らの設定したテーマの探求に精を出す。チームあんこも、それまで思案してきたものが机上の空論にならないように積極的に動き始める。

「今日は科目提案の方と教務センターの方に話を聞きに行きました。普段、授業は『元からあるも

の』としか思っていなかったもので、作るサイドの方からのお話は納得できるけど、目からウロコ！という感じで、とてもおもしろかったです。授業を作る仕組みも少し知ることができ、興味が出てきました。これからが楽しみになる日になりました」

「今日は中野さん(科目提案学生委員)と山村さん(教務センター)にインタビューさせていただきました。中野さんに『科目提案学生委員会は成績や経済面で問題があり、100%学生の希望をとり入れることができないから、希望をつめこんだ授業を作ってほしい』と仰っていただきました。中野さんや山村さんに胸を張って提案をできる授業を作ります！」

いよいよ、新しい科目の創案が本格的に始動する。このグループのすぐれているところは「自分たちのアイデアはじめにありき」ではなく、ひとによって考え方や感じ方が異なっていることを尊重し、可能な限り、より多くの人に受け容れてもらえるような内容やフレームワークを考えようとしていることにある。

「この一週間で、一人一人課題を決めて、各自まとめたり、調べたりしてきたので、とてもスムーズに話が進みました。チーム3人の学部がバラバラなので、考え方や知っていることがやっぱり違って、いろいろと驚くことも有り、楽しいです。また、LAさんはとても物知りで、いつも助言をしてくれて助かっています！ありがとうございます」

「今日は発表内容をつめました。自分たちで計画しながらわくわくしています。LAの方々が、私たちが考えた授業を『受けない』と言って下さるのがとても嬉しいです！！来週は内容をまとめてくるので、LAの方々と先生に意見をお聞きしたいです」

いよいよ授業も終盤に入り、最終プレゼンテーションに向けての準備に余念がないが、チームあんこは体裁を整えることには目も向けず、最後まで修正、改善の可能性をきちんと見据えている。

「今日は発表に向けて練習をしたり、LA さんに意見を出してもらったりしました。自分の頭のなかでシミュレーションをするだけでは分からなかったことに気づけたり、3 人の発表をつなげるときの注意点が見つかり、よかったです。内容はつめられたので、あとはこの今までの成果をどれだけ面白く皆さんに伝えられるかにかかっているので頑張ります！私たち自身も、毎回の授業を楽しみながら進めてきたので、この楽しさを分かっほしいと思います」

最終プレゼンテーションは1グループが十分に発表する時間を確保するために複数回に分けておこなう。チームあんこに先だって発表した他のチームが「つまらない授業、行きたくなる授業」の例を挙げながら、関西大学にクラス制を導入すれば、学生同士のコミュニケーションが深まり、授業に参加するのが楽しくなるのではないかと提案していたことに刺激され、チームあんこのメンバーはおそらく発表の内容や方法をさらにブラッシュアップさせたに違いない。

チームあんこの最終プレゼンテーションは受講生の耳目を奪うものだった。冒頭で「本当にいい授業とは？」という問いを立て、そのことについて思索を深めながら、より多くの学生の意見を聴取する必要があると判断して実施したアンケート調査の結果を報告する。「単位がとりやすい」を選んだ学生 15%に対し、「自分のためになる」を選んだ学生は 85%と圧倒的に多かったが、いざ時間割を作成すると単位のとりにくい授業を選ぶ傾向があることを指摘した上で、「本当にいい授業」ならば単位取得の難易度にかかわらず履修するはずだと考え、それを実現するための方策を探った。チームの調査によると人気のある授業とは、座学とグループワークのバランスがよくメリハリがある、内容が印象深く記憶に残りやすい、疲労を感じることなく集中しやすい、教授の人柄に惹かれるなどの要素を携えた授業であるが、時間割の関係で必ずしもそのクラスに受講生が集中するとは限らないので、履修希望者の多寡だけでは決

められないと判断している。

チームメンバーは早い段階から科目提案委員会に着目しており、この委員会あるいは学生委員と連携を密に取れば自分たちの望む科目の授業を実現出来ると考え、委員からのアドバイスをもとに科目のイメージを膨らませるとともに、具体性、実現性の高いものへと育てていこうとしていた。チームあんこは、学生に希望する科目についてのアンケートを実施してニーズを把握し、そこに科目提案学生委員のアイデアを加味し、事務職員や教育職員の意見を聴取した上で、それらを反映させたシラバスを作成する、という戦略が実現可能性の高いものになると考えた。学生へのアンケートの結果、座学ではなく、少人数のクラスで学びたい、内容としては恋愛について学びたいというリクエストが圧倒的多数であった。しかし、大学の授業科目において恋愛の何をどのように教える（学ぶ）のか、成績評価はどのようにするのか、なかなかクリアできない問題がいくつか浮かび上がる。そんな折り、早稲田大学に「恋愛学入門」（科目担当者森川友義教授）があることを発見し、恋愛が大学の授業科目として成立することに意を強くするとともに、同様のものは作れない、作りたくないと考えるに到る。自らのグループがそうであったように、異なる学部・学部に在籍する学生が混在していた方が会話に広がり生まれ、多角的・多面的な考え方もできるようになり、これこそまさに全学共通の教養科目に相応しいものであると考えて「いろいろな学問から見つめる恋愛」をテーマとする科目の提案を試みた。クラスサイズを大きくせず（人数制限が設けられない場合には少人数のグループを編成することにして）グループワークを十分に展開できるようにすること、授業内でミニ講演を何回か開催し、異なる分野からゲストスピーカーを招くこと、そうやって受講生を惹きつけながら、授業が最終回を迎える頃には、多様な分野の人達との会話を通してコミュニケーション力が豊かになり、学生自身が他の人を惹きつける魅力を携えられるようにすること、

これを目指したいとの希望を表明してプレゼンテーションを終えた。

大学教育論の授業では最終プレゼンテーションについても受講生全員が評価し、その結果に応じて各賞が授与される。チームあんこはその賞とは別に特別賞も授与され、次年度に大学教育論の授業で登壇する権利を獲得した。

3. シラバスの修正

チームあんこのメンバーの一人は、大学教育論を受講していた他のチームの二名と共に科目提案委員会の学生委員に応募し、恋愛に関する授業科目の提案をすることになった。以後、約1年をかけて内容についての討議、方法についての検討、授業担当者の選定、ゲストスピーカーへの打診など、多方面に亘って慎重に準備を進めていった。その一部始終をここに掲載するとかなりの分量になるので割愛するが、続々と新しいアイデアが出て、その整理に困る時期もあったと聞く。

筆者に科目担当者の打診があったときは、既に大学教育論の授業でどのようなコンセプトやアイデアを持って受けたい授業科目についての提案をしてきたか、その経緯や背景を知っていたので、二つ返事で承諾した。とはいえ、学生委員のメンバーは自分たちの思いの丈を自分の言葉で表現しきれていないところがあり、幾度か話し合いながら、それを確認する機会を持った。

当初、学生委員が作成したシラバスの科目名には「いろいろな学問からみつめる恋愛」と表記されており、授業計画は各学部の専門に照らし合わせて恋愛をテーマに取り上げるようなデザインが施されていた（図1参照）。

それを受けた筆者は、すべての学部で1回限りの講師を依頼するのはきわめて困難であること、各回の授業内容には「恋愛」が関係していることは読み取れるが、必ずしも全体を通底する一貫性が感じられないこと、学生が主体的、能動的な学習者になる契機の準備が十分でないことなど、改善すべき点を伝えるとともに、今一度、どのよう

な授業にしたいのか、そのねがいとねらいを確認することにした。

図1 科目提案学生委員が作成した初期シラバス

■学科・研究科	全学部・全学科	■時間割コード	00001
■科目名	いろいろな学問からみつめる恋愛	■授業形態／単位	春／2
		■クラス	A
■担当者	各学部の講師、三浦先生、竹村さん！	■曜限	水2

■授業概要	■授業概要
	グローバル化や多様化が進む現在社会において、同じように恋愛も変化してきている。この授業では、関西大学に存在する13学部の講師の方々にリレー形式講義をしていただき、さまざまな視点から恋愛をみつめる。また、40人ほどの少人数クラスなので(ママ)、グループワークを通して様々な学部の学生と触れあうことができる。
■授業計画	■到達目標
	・さまざまな学部の授業や生徒(ママ)と触れあうことで、価値観を広げる ・恋愛が社会や個人に与える影響を理解する
■成績評価の方法・基準	■授業計画
	第1回 <システム理工学部> 恋愛の確率論 第2回 <経済学部> ハブ経済と恋愛 第3回 <文学部> 日中文学からみる恋愛 第4回 <総合情報学部> マディアから考える恋愛 第5回 <商学部> 恋愛が市場に与える影響 第6回 <人間健康学部> モテるための身体作り 第7回 スペシャルゲスト① ????? 第8回 <教養創造学部> DV 第9回 <法学部> 法によって縛られた恋愛 第10回 <社会安全学部> 震災から学ぶ恋愛 第11回 <外国語学部> 国際結婚 第12回 <化学生命学部> 恋愛と味覚 第13回 <社会学部> 再婚をつかむ食事 第14回 <環境都市工学部> デイブームを狂える 第15回 スペシャルゲスト② 森川友義先生「なぜ日本にいい男がいないのか」
■教科書	■成績評価方法
	定期試験(80%)→ただし所属学部以外の問いに答えること 講義会後のレポート(10%×2)
■参考書	■成績評価基準
	各回で取り上げた基本的な問題や概念について正しく理解できているかどうかを判断する
■備考	■教科書
	教科書は使用しない。担当者各自によるレジュメ等の資料により行う
	■参考書
	各担当者が講義中に適宜紹介する
	■備考
	この授業は恋愛学を学ぶものではない この授業を受けたからといって、彼氏や彼女ができるわけではない。それは個人の努力次第である！！！！！！

折しも翌年に関西大学創立130周年の記念事業があるが、その記念式典に学生が全く関与していないことを残念に思っているため、なんとか学生がそこに参加できないだろうか、できることなら、この授業科目を通して学生たちの心に働きかけ、そのような企画を立ててみたい、そのためにコミュニケーション力、企画力、交渉力などを培う内容にしたい、そのような意志と希望のあることを感得した筆者は学生委員と相談しながら、以下のようなシラバスを作成した。

まず、授業概要については学問を身近なものに感じてほしい、学問に恋心を抱いてもらいたい、そして「関大生の学びに対するイメージを変えたい」、それがやがて『『考動』する関大人』につながるはずだ、そのような学生委員の気持ちを汲み取って、以下のような文章を編んだ。

『学問の原点は身近な事柄や現象に対する知的好奇心にあります。そのことを私たちは忘れてしまっていないでしょうか。この授業では、まず大

学での学びが日常生活と繋がりを持っていることを改めて確認します。そのうえで、学部で修める専門知識を縦横に駆使して、身近な現象をさまざまなアングルから捉えていきます。例えば「恋愛の経済効果」「化学反応する心」「恋愛の社会学」「忘れえぬ結婚式場の設計」などはいかがでしょうか。自分の専門がこんなにも身近な学問であることを喜びましょう。自分の専門外の学問が新しい切り口を教えてくれることに驚きましょう。このような驚きと喜びを共有するために、授業はグループワークを中心に展開します。そのグループワークの目標を「130周年記念のイベント創り」とします。複数の学問からのアプローチで斬新な発想を生み出し、その実現に向けて企画を練りましょう。』

これは第1回の授業で表現を変え、パワーポイントのスライドによって受講生に伝えられた。

『学問は身近なものごと ことがらに対する疑問が出发点です しかし そこには身の回りにあるものごとやことがらに対する好奇心が不可欠です それ以前に そこを歩いた多くの人が気付かなかった貝塚をモースが発見することができたのは知的的好奇心あつてのことです まずは自分の身の回りに目を向けましょう そして それに興味を持ちましょう そう 恋するような感覚で / 自分が専攻しようとしている (あるいは専攻している) 学問がどんなことを得意としているのか 守備範囲を知りましょう それは自ら修める学問に恋をするための出发点です さらに他の学問が何を得手としているのか そのことも知りましょう もしかしたら自分の専攻している学問と他の学問との間にハッピーマリアージュが生まれるかもしれません / そのような体験をするために まずは「恋愛」そのものを素材にしましょう それぞれの学問が この素材をどのように調理するのか 考えただけでもワクワクしてきます みなさまが素敵なシェフとして存分に腕を振るえる時が訪れますように』

続いて到達目標は学生委員の胸中にかねてより

あったが、なかなか言語化できなかったねらいーコミュニケーション力、企画力、交渉力の涵養ーをここに謳うことにした。

『キャリア管理能力に必要とされる“DOTS”を身近な現象を素材にとりながら体験し、自らの糧とします。以下、授業の進度に応じて達成目標を示します。

S (Self Awareness) : 「自分史」を作成し、グループメンバー間で相互に公開することにより、他者による評価も含めた自己の認識・確認の体験をします。

O (Opportunity Awareness) : 自らの専門分野の意義と価値を確認するとともに、他分野の意義・価値を知ることにより、自らが修める専門分野の可能性と新たなアプローチの広がりを確認します。これが「自己変革の機会認識」につながります。

T (Transition Learning) : 専門を異にするメンバーと共にアイデアを創出したり、必要な情報を得るための調査をしたりすることにはストレスやフラストレーションが伴います。しかしこれをクリアしなければグループワークを効果的に展開することはできません。すなわちグループワークを通じた「環境適応学習」をします。

D (Decision Learning) : 複数回の討論等を経た上で最終的に進む方向を決めなければなりません。その時に肝要なのはグループ内での複数のアイデアなどに優劣をつけるのではなく、どの発案者とも永続する信頼関係を築くことです。これが交渉を進める上で最も大切なことです。すなわち効果的な「意思決定学習」をします。』

学生委員は改めて 15 回の授業で受講生にどのような力をどのようにして身につけてほしいのかを考え、3 種類のグループワークを用意した。それが反映された授業計画を以下に示す (図2)。

なお、授業時間外学習については以下のように定めた。

『グループワークを中心とした授業を展開します。週に一回の授業だけではワークは進みません。授業時間以外の共同学習を通じて、グループワーク

をより高度なものへと発展させます。また、「恋する学問通信」を毎授業で配付する予定です。こちらを授業時間外に読み、前回の授業内容を確認するとともに、今後の授業展開を確認するようにしてください。』

図2 修正されたシラバスに記載された授業計画

回	授業内容
第1回	Introduction+Grouping
第2回	自分史を作る+恋愛観について語り合う
第3回	学部ワーク1:自分が在籍する学部を改めて見つめ直す/他学部の学生に自学部のPRをする
第4回	学部ワーク2:130周年記念イベントに関するプレスト
第5回	恋愛ワーク:学外では日常的であることを学内で実現するためのプレスト
第6回~第8回	ワーク1~3:記念イベントの企画立案+ビジネスパートナーの発掘など
第9回	中間報告会1
第10回	中間報告会2+2ジャンルでMVPを各1グループ選出
第11回~第13回	会社ワーク1~3:MVPプランのブラッシュアップ・完成・PR
第14回	最終プレゼンテーション
第15回	選考結果発表・総括

このほか、成績評価の方法については、『定期試験を行わず、平常試験（小テスト・レポート等）で総合評価する』こととし、毎回の小レポート・グループワークの充実度・最終プレゼンテーションの配点比率を50:30:20とした。その基準は『到達目標の達成度・グループワークへの貢献度（コミットメント）・プレゼンテーションなどにより総合的に評価する』こととした。

これで目標や内容などが定まり、科目としての体裁も整ったかのように見えたが、学生委員の創作活動はここより佳境に入るのである。

4. 進化する授業

授業で共にワークをした仲間と「受けなくなる授業科目」のデザインをし、グループは異なったが同じ科目を履修していた学生二名とともにそれを実現するために科目提案委員会学生委員になって検討を重ね、科目担当者も決まり、内容や方法もほぼ決まったが、目前にあって、さらなる改善、修正、向上を求めているのは自分では履修することのできない科目である。しかし学生委員はそのことに気付いた後でもモチベーションを低下させることなく、次々に新しいアイデアを生み出していく。彼女たちを支えていたのは『提案したこと

を聴いてくれる人がいる、実現（できるかもしれない）という夢がある。実際に実現出来た例がこの授業である』という気持ちであった（メンバーの一人松田昇子の覚え書きより。以後、「松田メモ」と称する）。この気持ちを自分だけのものとせず、より多くの学生にも抱いてほしいと考え、自分の考えに耳を傾けてくれる大人が近くにいること、つまり学生を相手にしてくれる大人もいるということ、それは自分が「ただの学生」にとどまるのではなく、「これからの関大を創っていける一人の学生」になれるということでもある、ということを授業の中で受講生に伝えようとする。既に作成したシラバスにこのことを反映させるために学生委員の面々は直前まで繰り返し、授業計画を見直した。

図3 直前まで練り直された授業計画

『恋する学問』授業計画				
2015年8月6日				
科目提案委員 篠原、緒方、松田				
授業	日時	大まかな内容	詳細(話し合い以外)	必要なもの
第1回	9月30日	授業紹介	・自己紹介 ・科目提案委員の説明 ・恋する学問 過去→現在→未来 ・名札作り ・先生からのお話	過去のPPT
第2回	10月7日	恋愛ワークI	・勇未さん →130周年イベントとは？ キャッチボール形式(A学生からの質問) ・130周年と恋愛と学問の結びつけ ・自分史(人生、恋愛)	自分史シート
第3回	10月14日	恋愛ワークII	・恋愛成立の過程や大学生の恋愛事情について考える ・恋愛の定義、詩作り	紙
第4回	10月21日	学部ワークI	・口×自分の学部	HMWKのミッションシート(探偵P)
第5回	10月28日	学部ワークII	・自分の学部×相手の学部×口	
第6回	11月4日			
第7回	11月11日			
第8回	11月18日	中間プレゼンI	・ポスターセッション	
第9回	11月25日	会社ワーク	ビジネスパートナー探し	
第10回	12月2日		* 文豪さん大学教育論	
第11回	12月9日			
第12回	12月16日			
第13回	1月6日			
第14回	1月13日	最終プレゼン	6班分	評価シート
第15回	1月20日	お楽しみ会		

図3の授業計画で網掛けがなされているのは関西大学創立130周年記念行事を担当する事務職員に来訪をお願いする授業回である。関係事務職員とは事前に連絡を取り、科目のコンセプトを理解してもらうように努め、前向きに検討する旨、約束をしてくれた。学生委員が130周年記念行事をもっと学生自身で盛り上げたいと願うのは「120

周年は10年前にあったこと、(このあとに)150周年が控えていること」は分かっているが、今、大学に通っている学生が学生として祝えるのは130周年のみである、すなわちこの節目を一番祝いたいのは自分たちであるという確信があるからである(松田メモより)。『恋する学問』のコンセプト、ねらいとねがいを十分に理解して頂いた事務職員にはグループワークがスタートする第2回目の授業において、130周年記念行事はどのようなテーマで、何をイベントとして行うのか、学生が行事を創るとしたら、どのような条件や制約があるのかについて話をしてもらい、中間発表をする第8回目の授業ではポスターセッションを見て感想と改善点を伝えてもらい、第14回の最終発表についての講評と学生企画の実現可能性について知らせてもらうことにしたのである。

以前に完成させたシラバスの内容に変更が加えられ、具体性が増して、さらに充実したものになっている。授業の実際とシラバスとに合致しない箇所があると、それを非難する向きもあるが、関西大学の場合、シラバスは書き上げてからそれを実施するまでに数ヶ月から半年以上のブランクがあるので、その間に授業を考案し、実施する側に何の進歩もないと前提することに無理がある。半年前に書いたシラバス通りに授業を実践できるのは、その授業の完成度が高く、その内容が正しくシラバスに反映されている場合か、シラバスを書いた以後、授業の内容や方法について思案を巡らせることが全くない場合のいずれかであると考えてよい。授業は「生物(なまもの・いきもの)」であるから、受講生のレディネスや理解の深度、学生の知的好奇心の種子が埋もれている地中の深さなどに応じて内容や進度を調整して然るべきである。少なくとも筆者はそう考えて授業に臨んでおり、受講生からシラバスとの相違についての質問ある時には、そのように応じている。学生委員はシラバスと授業の整合性よりも、さらにまたシラバスライティングのリテラシーを身につけることよりもさらに重要なことを学んだと筆者は観察し

ている。

秋学期が始まり、いよいよ初回の授業が近づくと、学生委員は授業計画を幾度も見直しをしては検討を重ねてきたにもかかわらず、不安をぬぐい去ることができない様子だった。とはいえ、それは想定内のことである。自らが初めて授業案を作成し、クラスに臨んだ時の記憶があれば、それは想像するに難くない。学生委員の誰もが授業時にそのような不安が受講生に伝わらないように自らの言動を律するのは間違いのないことだが、少しでも自信を携えて授業に臨めるようにと、筆者は学生委員をこのクラスのLA(Learning Assistant)として配置することにしていた。一般的に自ら提案した授業を受講できない科目提案委員会の学生委員は、当該授業時間中はガイド役に徹することが多いのだが、このたびの学生委員は三人ともLAとしての勤務歴があったため、その経歴を大いに活用してもらうことにした。自分たちがデザインし、開講することになった科目を受講こそできないが、受講生に「このような科目を受けたかった。受けられてよかった」と感じてもらえるように支援することが学生委員ならびにLAとしてのアイデンティティにつながると考えたのである。

とはいえ、授業内容が受講生に受け容れられるかどうか、授業計画が適切なものかどうかについては、授業が始まらないとわからないことであるし、授業が始まったからといって、その全てが解明されるとも限らない。グループワークのファシリテーションをつつがなく進めることができても、そのことがそれ以外の不安を小さくすることは、当初はなかったに違いない。しかし、授業後の昼休みに集まって反省会を開き、授業当日の朝は遅くとも8時には集合して打ち合わせをする、そのような作業を積み重ねることで、自分一人では気付かないことでも三人ならばそれを補えると、次第に感得するようになっていく。

学生委員は授業計画の立案やグループワークのファシリテーション以外にも積極的、能動的に活

動をしていた。例えば、授業中に受講生が書いた小レポートをすべて活字に起こし、そのそれぞれにコメントを付し、『恋する学問』通信』として次回の授業時に配付したのである。これは筆者が大学教育論や教職概説の授業で実施していることであるが、大学教育論の既修者（うち一人はさらに教職概説の既修者）であるメンバーは、これに倣って毎回、通信を発行した。いや「倣って」ではなく、「越えるかたち」が正しい表現である。

第1号は科目担当者が作成したが、以後は学生委員が合同で作成していった。筆者自作の通信を越えた部分は、毎号、必ず、前回の授業のテーマを分かり易い一言と簡明な説明文で明示したことである。その一部を下に紹介する。

図4 学生委員が作成した通信の巻頭言の例

【気づく】

第3回目のテーマは 気づく でした。
自分の意外な一面 新たな一面に 気づき
仲間の 良い一面 可愛らしい一面 面白い一面に
気づき これからの生き方のヒントに気づく
きっかけになったのではないのでしょうか

『恋する学問』通信 第3号より

【化学反応】

今回は皆さんにテーマをあえて秘密にしていました。
色んな「化学反応」を実感してもらえましたか？
実はこのテーマは前回から始まっていました。
自分の学部と恋愛。自分の学部とパートナーの学部と
恋愛。などなど
仲間と考えを共有したり、授業に潜入したりすることで、
自分の頭の中だけで考えていた時には決して気づかなか
った発見が沢山あったのではないのでしょうか？

『恋する学問』通信 第5号より

授業の開始時に、必ずその日のテーマやワークの内容を、工夫を凝らしたパワーポイントのスライドによって受講生に伝えることも、毎回、欠かさずおこなっていた。

その他にも、恋愛に関するアフォーリズムを通信の上で紹介するばかりではなく、その一部を空欄にしておき、グループごとにそれを埋める名言を編み出すワークをアイスブレイクとして用いたり、「恋する川柳」を作成する時間を持ったり、それ

を作品として次回の授業時に教室の後ろのホワイトボードに貼り出したり、卒業生二人をゲストスピーカーとして招いたり、第8回目の授業における中間プレゼンテーションのテーマを関西大学130周年記念事業のコンセプトに肖って「学縁を広げよう！」に設定したり、直前に到るまで修正を重ねた授業計画にはなかった新しいアイデアが授業のなかで確かな「かたち」を持つものになっていった。それは修正というよりは進化と呼ぶべきものである。

図5 学生委員が作成した通信(第8号1頁目)

『恋する学問』通信 第8号

【ハッピーマリアーージュ】
チームの色が出た自己アピールタイム。いろんな感情が渦巻いていた自由時間。そして、みんなの笑顔が見られた告白タイム。ここでチームの思いが一つの形になりました。しかし、みなさんお気付きのように、ここが新たなスタートです。次はどんな化学反応が起きるのか・・・ワクワクします♪

【学部のサラダボール】
メンバー：
・チームおにぎりにラブレターを渡しに行きました。面と向かって誰かに告白することは久しぶりだったのでとても恥ずかしかったです。告白を受けてくれた時はとてもうれしかったです。これからチームおにぎりと共にがんばろうと思います。(秀一)
→私たちも思わずドキドキしてしまいました！「共ががんばる」いいですね！チームおにぎりと、これからどんな化学反応を起こしていくか楽しみです！

・告白形式でチーム決めでしていくスタイルが新鮮でおもしろいと思いました。今後楽しみです。(朋佳)
→新鮮さを感じてもらえて嬉しいです！告白形式にすることで、より皆さんの「相手に気持ちを届けたい」という想いが伝わってきましたよね！

・告白タイムの時にBGMを流していたらさらに場が盛り上がったかも。班同士が合体して一からの出発というのが面白いこれから楽しみ(大輔)
→提案ありがとうございます！いいですねBGM！最終プレゼンでは、パワーポイントも使用できるので、BGMをつけて新たな合同チームの個性を出したりして、ぜひ楽しんでみてください！


・クリスマス前に両想いになれてよかったです。おにぎりさんとはこれから仲良くがんばっていききたいと思います。どの班もすぐ考えられてラブレターもかわいくて、すごいと思いました。宇宙人つくったり、UFOつくったりして、内容があまりポスターにかけなかったのですが、えらんでいただけよかったです。笑(友梨)
→両想いおめでとうございます！どのチームも、アイデアや表現の仕方に、チームの色がすぐ出ていて面白かったですよね！学部のサラダボールの、多くは語らない感じが、「未知の感じ」をますます強めていくワクワクしましたよ！合同チームになってどんなアイデアに発展させていくか楽しみです！

科目担当者との合意形成や意見交換あるいは共有は原則として facebook 上でおこない、必要に応じてミーティングの時間を持った。また授業内容については facebook や twitter での発信もおこなっている (facebook の URL アドレスは以下)。

https://www.facebook.com/%E6%81%8B%E3%81%99%E3%82%8B%E5%AD%A6%E5%95%8F-1655248264750481/?ref=notif¬if_t=page_invite_accepted

図6 第5回目の授業内容を示すスライド(一部)





HAPPY HALLOWEEN
Koisorugakumon




もし あなたが
大学の授業をつくるとしたら
どんな**90分間**にしますか？

学部 × 恋愛

=

① まずは自分の頭で考えてみよう！  創る	② チームで共有しよう！  発見
③ 情報を集めよう！  深める	④ あらためて授業を考えてみよう！  創る

恋する  **ミッション**

- ① パートナーの学部に潜入しよう！
気づいたことはワークシートに！
- ② 自分の学部×パートナーの学部で
恋愛の授業をつくってみよう！
- ③ 今回のミッションの感想など
自由に書こう！

氏名： _____ 学籍番号： _____ 月 日 限 パートナー： _____



ミッションシートを共有しよう！



この学生委員三名の取り組みは、今年（2016年）の2月26日に東京都市大学二子玉川キャンパスを会場に株式会社ラーニング・バリューとLV College が主催する“Field of Invaluable learning 2016”へのエントリーが認められ、それに向けてメンバーは二年半の足跡を省察している。『恋する学問』は次年度も開講されるので、その省察がどのように反映され、さらなる進化を遂げるのか、科目担当者はまさに「ワクワクドキドキ」している。

最後に、大学教育論の授業で恋愛に関する授業の提案をおこなったグループの一員であり、科目提案学生委員として、その開講のために尽力し、授業ではLAも努めた松田昇子氏の授業に関する感想を掲載したい。ここには「よりよい授業」を

つくっていくために必要なこと、大切なことが綴られている。それは教壇に立つことに慣れてしまうと忘れてしまうことかもしれない。この文章に限らず、学生委員三名の希望と苦悩、そして着実に歩みを進めるその姿は、我と我が身を振り返り、反省するきっかけになっている。

私は、受講生の顔を見て、その日の雰囲気を感じとる力とその雰囲気に対応する能力が必要だと学びました。授業を企画する以上、受講生が生き生きと出来る授業を考えることは当たり前です（そうだと信じたい...）。

しかし、100%準備をして臨んでも、一緒に準備を作り上げる受講生のモチベーションがなければ授業は成功しません。

私も、最初は準備してきたことを「披露」することしかできませんでしたが、少し余裕がでてきたときに周りを見てみると、自分達の自己満足で終わっていることに気がつきました。

それからは、授業は生き物だと思い、その日の授業と向き合うことにしました。例えば、発表準備をする回の授業では、教室に入ってくる時から、なぜか元気のない人がたくさんいました。その時は理由がわかっていなかったのですが、後から考えると中間試験の時期で忙しい学生が多かったのだと思います。準備段階でそこまで考えられていなかった私たちは、授業中に人間知恵の輪をし、場を温めようと、授業が始まってから決めました。そうすることによって、雰囲気が変わり、イメージしていた通りの活気ある授業をすることができました。前の授業から次の授業までの1週間の間に、受講生も私たちも様々な経験をしています。だから私たちは早くその日の雰囲気を感じ、準備をするときに想定していた雰囲気に近づけることが必要だと思います。

参考文献

Barr, R. B. & Tagg, J. (1995) From Teaching to Learning: A New Paradigm for Undergraduate

Education, “Change”

【付記】

2月26日に開催された Field of Invaluable Learning 2016 (Fil 2016) において、学生が提案した科目『恋する学問』は第一位を受賞した。

三浦真琴（関西大学教育推進部）

松田昇子（関西大学政策創造学部3年）